技術者からの視点

●第48回●

大学の秋入学

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

今年の1月、東京大学が、「入学時期の在り方に関する懇談会」の「中間まとめ特集版」を発表した。表紙に記された「よりグローバルに、よりタフに」の標語のように、国際化に対応した教育システム構築の一環としての、秋入学への移行についての検討書である。

大学の入学時期は、日本、インド、パキスタンなどが4月、韓国が3月だが、欧米諸国や中国は秋入学を採用している。欧米に限れば80パーセントが秋入学だそうだ。

日本でも、1872（明治5）年の学制発布から1920（大正9）年まで、大学などの高等教育機関は秋入学だった。ただし、1887年にできた高等師範学校は、会計年度や徴兵登録期日と一致させるという理由から、4月入学になっている。1921年に、高等学校と大学が4月入学に変わった理由は、中学校と高等学校との連関、大学卒業までの期間短縮、会計年度との一致であるが、日本人教員の増加により、欧米の制度に合わせる必要がなくなったこともそのひとつという。なお、主要国で、入学時期と国の会計年度が一致するのはインドと日本である。

わずか2パーセントの外国人率と東京大学の総合評価・国際化評価

資料は、国際性を備えたタフな人材の育成を行うためのグローバル・キャンパスの形成に欠かせないものとして、海外からの留学生の存在を挙げている。東京大学の学部での留学生比率は現在2パーセント弱であり、ハーバード大学の5分の1、香港大学、シンガポール大学の10分の1である。

大学院での留学生比率は19パーセントに上がるが、それでも米国有力大学の3分の2、香港大学の半分（ただし中国本土からの留学生を除くと11パーセント）、シンガポール大学の3分の1である。ちなみに、東京大学の助教以上の教員に占める外国人の割合は、2011年現在2パーセント強であり、欧米有力大学の15パーセント以上（2006〔平成18〕年）とは大きな差がある。

世界は、東京大学をどのように評価しているのだろうか。よく引用される大学ランキングは、THE（Times Higher Education）ランキングと、数年前までTHEランキングと共同で行っていたQS（Quacquarelli Symonds）ランキングである。

THEランキング（2011年12月）の総合順位では、東京大学は30位である。首位はカリフォルニア工科大学で、その後ハーバード、スタンフォードと米国の大学が続き、イギリスのオックスフォードが4位である。15位の、アインシュタインが学んだスイスのチューリッヒ工科大学を除くと、29位までは米・英・カナダの大学が占めている。

THEの評価中、国際化の評価に限ってみた場合には、総合順位で34位の香港大学が84

点、欧米有力大学が60点前後の得点を得ているが、東京大学は23点しかない。

ＱＳランキング（２０１１年12月）には、世界中の研究者が選ぶピア・レビューがある。東京大学はこの部門では、ハーバード、オックスフォード、ケンブリッジ、カリフォルニア大学バークレイ校、スタンフォード、マサチューセッツ工科大学に次ぐ7位になっているものの、総合順位は25位である。

高学歴人材を集めた非グローバル地方都市

昨年、米『ナショナルジオグラフィック』誌12月号に、「世界に影響を与える都市一覧」として、15都市の順位が掲載されていた。

この雑誌では「ビジネス活動」、「人的資本」、「情報交換」、「文化的経験」、「政治的関与」の5分野に分け、各都市の評価を行っている。

総合順位は僅差でニューヨークが1位、ロンドンが2位。少し離れて東京が3位、僅差で4位がパリ。5位以下の都市と、上位4都市とは大きな得点差がある。出典は、コンサルタント会社ＡＴカーニーの『グローバル・シティ・インデックス２０１０』である。

元資料を見て、グローバル・シティ3位と高く評価された東京にも、国際化の点で脆弱さがあると感じた。東京が、総合順位で上位にいるのは、ニューヨークに並ぶ得点を得た「ビジネス活動」分野（重みづけ30パーセント）での高い評価によるものである。しかし、「多様な人材やすぐれた才能を持つ人を引きつける機能を持っているか」を測る「人的資本」分野（重みづけ30パーセント）での評価に問題がある。

この分野は、「外国人居住者数」、「留学生の数」、「学卒者の人口に占める割合」、「高等教育機関の質」、「インターナショナルスクールの数」の5項目で評価される。分野全体では、東京はニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴ、などに続く6位である。

項目別に見ると、東京は「学卒者の人口比率」では圧倒的な差をつけた1位である一方、「外国人居住者数」と「留学生の数」では、9位に大差をつけられた最下位である。

つまり東京は、世界中からの多様な人材が集まり活躍するグローバル・シティというよりも、国内の高学歴人材を集めた巨大地方都市として読み解くことができる。

大学の根本に立ち返って

日本には、受験生を右往左往させる、学力偏差値という妖怪的格付けがある。しかし一般的に、日本における格付けとは、相撲の番付に見立てたものが多いように、好事家たちが楽しむ指標であり、目くじらを立てて争うものではないと思われている。

一方、欧米には、専門機関が競って精緻な格付けを行う文化がある。米国の信用機関が発表する格付けが、国際経済に大きな影響を与えている。国際化が進む現代、日本の大学と都市が、国際化指標で低い評価を受けている。これは対処しなければならない問題である。

現在の大学は、中世ヨーロッパの、教師や学生が国家の枠を超えて集まった団体（ユニバーシティ）から始まる。

大学は、世界中から多種多様な逸材を引き寄せる魅力を持たなければならない。

東京大学の「入学時期」の検討資料は、日本が抱える多くの課題を提起している。日本の大学が、巨大なキャンパスと均質な学生という衰退への道を歩まないように、具体的施策が実行されることを期待する。